

第75歩

「酷（ひど）い夏」になってしまった。」

このコラムでも何度か取り上げていますが、近年の夏の暑さには、驚きを隠せません。私が子どもの頃の夏は、暑かった記憶はありますが、せいぜい「今日は暑いなあ」と汗を拭う程度でした。打ち水をし、夕暮れには風鈴の音とともに涼しさを感じる。そんな夏の風情がありました。

ところが今はどうでしょう。盛夏の季節には、「命に関わる危険な暑さ」という言葉が毎日のように繰り返されます。かつては特別だった35℃超えが当たり前になり、40℃に迫る、あるいは超える日まで現れるようになりました。

「猛暑日（もうしょび）」という言葉が定着したのは平成19年のことです。それ以前は、35℃以上の日を表す言葉さえ一般的ではありませんでした。しかし、その後わずか十数年で、「猛暑」では表現が追いつかず、「酷暑」という言葉が自然に使われるようになりました。「酷暑日（こくしょび）」とは、1日の最高気温が40℃以上となる日のことを指します。近年の記録的な猛暑を受けて、気象庁が令和8年4月に天気予報などで使用する正式な予報用語として追加しました。言葉は時代を映す鏡だと言われますが、まさに気候の変化が、新しい言葉を生み出しているのだと感じます。日本の夏の暑さは、「猛々（たけだけ）しい暑さ」を超えて「酷（ひど）い暑さ」のレベルまで来ました。「猛暑」から「酷暑」へ。その変化の早さに、私たちはもっと危機感を持つ必要があるのではないのでしょうか。熱中

症対策はもちろんですが、都市の緑化、省エネルギー、公共施設の暑さ対策など、自治体として取り組むべき課題も年々増えています。次の瀬戸内国際芸術祭も夏会期の暑さにどう対処するかということを具体的に検討しています。

かつて日本には、四季の移ろいを楽しむ文化がありました。暑い夏もまた、楽しみの多い季節でした。その夏が、「耐える季節」になりつつあることに、言い知れぬ不安感を覚えるのは私だけではないでしょう。未来の子どもたちに、「今より少しでも楽しめる夏」を残せるよう、一人一人ができることを考えていきたいと思います。

